

あいされみごさん

「そんじゃ、行ってきま〜す」

風が吹いて赤い葉っぱが降る中、あたしはパンパカパンから飛び出した。

「おー、ふたりによるしくなあー」

お父さんの声を背中に聞きながら、手さげ袋を両手に持って。

二階の窓からは、みのりが手を振ってる。一緒に行く？って訊いたんだけど、お仕事じゃましちやダメでしょって逆に怒られちゃったっけ。

「ぎゅあ〜あ」

店の外、隅っこにいたウチの飼猫、コロネがひと声鳴いた。いってらっしやい、だよ。どこ行くかも知ってるんだらうな、あの顔は。

まったく、さあ。

「うちのみんなに愛されてるよねえ、満みちと薫かほは」

「日曜なんて、部活の練習はつかだつただけだなあ」

おおぞらの樹のある森に向かって歩きながら、ついぼろっ、と言葉がこぼれちゃった。

今年の大会がひと段落ついて、新しい部長に細かいこと全部お願いしちゃったし。あいつにはちよっと厳しいかもしれないけど、あたしも去年やられたもん。我慢してもらおうか。

「それにしても」

練習の代わりに、毎週通かよってるのはおおぞらの樹。っていうかあのふたり、満と、薫のとき。

「フオーしなくちゃ、っただけだったのになあ」

ちちが強いし、昔ほどじゃないけど無表情だしで、なんか疑われないかな？って思っまて舞まいと相談したんだよ。

でもって結局、巫女さんってことにしちゃったん

3 あいされみこさん

だ。おおぞらの樹の。ほこらもあるし、お祈りする人も多いし、巫女さんがいても不思議じゃないかもそれだけだったんだけど。

「いつの間にか、町のみんなも巫女さんが自然になっちゃったんだもんねえ」

お父さんもお母さんも、満たちが昔から巫女さん見習いだったって思ってる。つい最近来たばかりなのにさ。

「たぶん、フィーリア女王なんだろっな」

「コネだつてしゃべっちゃうんだもんね。そのくらいは簡単なんだろうな。」

とは言つても、

「まさか、自分で稼かせぐつて言い出すなんて思わなかったなあ」

「そう？ わたしは別に意外じゃないけど」

あ、舞。いつの間にか、あたしのとをりを歩いて、片手から荷物を奪つてった。

「悪いね、いつも」

「なに言ってるの。わたしだつて会いに行きたいわ」
学校じゃ毎日会つても、巫女さんのふたりには休みの日しか会えないもんね。

ほんと、実際さ、

「愛されてるよねえ」

きよとんとしてる舞の顔ちらつと見て、あたしはあいた手を振つた。

うん、愛されてるよ。舞に、ね♡

「ところで咲さき。両方、お砂糖？」

隣を歩く咲が持つてる荷物と見比べて、わたしは訊いてみた。

「いんや、舞が持つてる方は塩しほだよ」

ああ、やっぱり。なんだか、わたしの方が小さいような気がしたのよね。

「これだけは手に入らないみたい、って言つても
のね、薫さん」

薫さんと満さんが住んでいるのは、おおぞらの樹
の近くの社務所　っばい家。いつの間にか、精霊
さんたちが作つてくれたらしいのよね。

水も、ガスもふつうに使えちゃうその家に、お金
まで湧いて来るのを見て、ふたりで決めたんだった
わ。自分たちでお金を稼がなくちゃ、って。でも

「和菓子にはどうしても必要だものね。お砂糖」

咲のお店がパンと、ちよつとした洋菓子だから、自
分たちは和菓子。そう決めたのはいいけれど、そこ
で行き詰まっちゃったんだわ。

「あとの材料はなんでも揃うつてのにねえ。栃の実
とか、クルミとか　」

「言っただけで集まっちゃうのよね」

あれもすこかったわ。咲がたとえば、で口にする
たび、目の前に木の実が積み上がっていくんだもの。

フィーリア女王さまに言われたからだけじゃ、こ

んなにはならないわ。みんな、本当に大好きなのよ
ね。薫さんたちが。

「集まつてるの見て、言つてたっけなあ。『これじゃ
精霊さんたちに悪い』なんて」

ふふ。

わたしはちよつと笑っちゃった。だって、それ聞いて
怒つたのは咲なんだから。『精霊にも少しは手伝わ
せてやんなよ！』って。

ああ、なんだか思い出しちゃうわね――

『砂糖くらい、うちから持つてきたげるよ。お代は
売上げから返してくればいいだけ、でしょ？』

あつさり咲がそう言つたから、薫さんに満さん、そ
してわたしまで、ぼかんとしちやっただけ。

『ちよ、ちよつと咲！ 勝手なこと言つて、売れな
かつたらどうするの？ どこで売るかも決まつてな
いのに　』

思わずわたしが言つたのよね。そうしたら、逆に

きよとんとした顔されて、またあっさり言うのよ。

『パンパカパンで売ればいいじゃん。』

それに、満と薫の手作り和菓子だよ？ 売れないはずないって！』

わたしはしばらくあつけにとられたのだけど、肩にほん、と手の感触があつて、背中から含み笑いの声が聞こえてきたわ。

『おおぞらの樹の巫女の手作り和菓子、なんて名前なら売れるかしら？』

『メロンパン風の和菓子も、珍しくていいかも』

振り返れば、薫さんたち。口に手を当てて、吹き出す寸前の顔があつた。

『ん〜。ヘンなことで気を引かなくともいいと思うんだけどなあ。満たちの手作り美味しいし、みんな喜んで食べるよ？』

咲の言葉に返ってきたのは、はあ、つてため息ひとつ。

『咲は、もう少し商売つ気を出したほうがいいと思う』

薫さんがそう言って、満さんもうなずいてる。うん そうなんだけど、ね。

『でも、咲だし』

わたしがちよつと口にしたら、

『 ああ 』

『 そうね 』

ふたりは咲をまっすぐ見て、ゆっくりうなずいたわ。

『ちよつとちよつとちよつとあー！ なんて納得するのよふたりとも!?!——』

うふふ。思わず顔がにこにこしちゃうわ。

「なーに思い出してんのさ、舞？」

「ふふ。多分、咲といっしょのことよ」

咲がやれやれ、つて顔で上むいて、

「女子中学生で巫女さんの手作り、だもんねえ、売れるよね」

なんて言うもんだから、わたしもちよつと上むいて、「材料は精霊さんたちが集めてくれた一級品で、ふ

たりとも手を抜くこと知らないんだもの。当然よ」

中学生も巫女さんも、どこにも書いてないことくらい、広告描いたわたしが一番よく知ってるわ。

「あー あのカタツ苦しいところが、こんなに役に立つなんて思わなかったなあ。お父さんなんかすっかり気に入っちゃってさ。うちで全部売るんだ、って言うて、あたしが頼む前に和菓子コーナー作っちゃったもんね」

そう言っている咲の顔が輝いてる。ほんと、

「愛されてるわね。精霊にも、パンパカパンの人たちにも」

それと、咲にも、ね♡

「満も薫も、受験はするんだよねえ」

森の入り口から坂を登りながら、あたしが訊いたら、舞がうなづいた。

「高校まででは一緒に行く、って言うてたわ」

はあ。あつたまいもんなあ、ふたりとも。人種とか、ついついイヤな考えになっちゃうの、押さえるのが大変だよ。

「高校までは、かあ」

結局、その後のことは聞き出せなかったんだ。考えてはいる、って言うだけで。

「ま、どこまでも一緒、ってわけでもないもんね。でもずつと、ともだちだから、それでいいか」

言うてから、あたしはまた上を見上げた。ずいぶん黄色や赤の葉っぱが降ってくるけど、緑の葉っぱもいっぱい残ってる——うん！

「ともだち、増えたもんねえ クラスの男子で、ちよつと時間があると満のことチラチラ見るヤツ、いるんだなあ」。わかりやすいつたら」

「女子もよ。特に安藤さん。薫さんによく話しかけているわね。なんにもないときでも」

みんな、巫女さんになったふたりには会いたがる

7 あいされみこさん

んだよねえ。昔から巫女さんっだて思い込んでるから、外の人みたく珍しくはないはずなんだけど。

「もっ少ししたら、お守りでも作ってもらおうかな」

少し先を歩いてた舞が、振り返ってそう言った。お守りかあ。

「受験の？」

「うん。効くと思っわ」

神様がいるってわけじゃないんだけどね、あのほこら

あたしはちよつと目を閉じてそう考えちゃったんだ

けど、目を開けたら舞の顔が近づいてた。え!?

「ふたりがちゃんと思いを込めて作ったら、効くと思わない?」

舞の言葉を聞いた瞬間、ふたりがお守りを縫ぬってる姿が、頭に浮かんだよ——そりゃあ効くわ。うん。

「みんなに、愛されてるね」

またちよつと離れた舞がそう言うから、

「愛されてるよねえ、いろんな意味でさ」
あたしも心えて、また歩き出したんだ。

森の中をしばらく歩いて、もう少ししたらおおぞらの樹。いつも、砂糖の袋はこのあたりから重く感じるんだよね。

「注文さあ、増えてんだよね」

「やつぱり? おいしいから」

重くても頑張りつつ思いながら話した言葉に、舞が返してくれた。けどね、

「それがさあ、商店街の和菓子屋さんからなんだよ」

「えっ!？」

はははっ。驚くよね。商売敵のはずって、あたしも思ってたもん。

「ふたりのお菓子のおかげで、和菓子好きが増えてんだってさ。あっちの職人さんも、研究しがいがあ

るって張り切ってるみたいだよ」

「ふうん そう、そうね。がんばりたくなるわよね。あのふたりを見れば」

深呼吸する音が聞こえて、舞の息がゆっくりになった。やっぱり、ちょっと重く感じてたんだね。

それにしても

「満たち、だんだん巫女さんらしくなってるよねえ」

「そうね 奉納ほうのうの舞いとか、きれいだったわ」

奉納の舞い、かあ。『巫女さんは、なににするものなの？』って訊かれて、あたしがほろつと言っちゃったから始めたなんて、誰も信じないだろうなあ

「おおぞらの樹の神さまだから、フィーリア王女に楽しんでもらえばいいのね、って。ふたりしているいるやってたわよね」

そうそう、いろんな踊りおど試してたんだよね、あの巫女さんの格好で。なぐんにもないほこらの前々々だけ、おおぞらの樹が背景になって、まるで舞台みたいだったっけ。

「にしても、筋肉踊りはないわ」

「あ、あはは。あはは、ね」

舞も苦笑いしてる。満と薫の踊りって、ダークフォーのあいづらが踊ってたのを真似したらいいんだけど キントレスキーは、ねえ。満と薫が並んでボーシングとか、慌てて止めたもん。

「結局、ミス・シターレとカレハーンの踊りをミックスしたって言ってたっけ。よくわからないけど、すっごく巫女さんらしかった」

「ええ。樹の前で踊るんだから、水と木でちょうどよかったんだと思うわ」

舞もスケッチブック持ったまま、見とれたもんね。ほんとに、きれいだった。

「あいつらもやっぱり、精霊の仲間だったのかな」

「そうね ちよつと、ほんのちよつと違ってたら、一緒に暮らせたのかもしれないわね」

あたしが足をとめたら、舞も黙って一緒に立ち止まった。

「でも、そのカケラは満たちといっしょに残ってる。
だよね——」

聞こえてくるのは、ちっちゃい川の流れる音に、
葉っぱが降る音、土が風で流れる音、ほかに、いっ
ぱいの音

トン トン

その中で、木を打つ音が聞こえてきた。

何度か社務所の前で聞いた、切り株の臼で、餅を
ついでる音。

(愛されてるね)

あたしが目で言ったら、

(愛されてるよねえ)

舞も目で返してきた。うん、そんじゃ！

「みちる満うう」

「かおる薫さん」

「おつかれっっっ」

先にふたりに気づいたのは、私の方だった。

「みちる、砂糖が来たわ」

坂道のむこうを登ってくるふたりを見て私が言う
と、

「砂糖が来てくれた、でしょう。かおる」

少しため息混じりに、みちるが返した。 砂糖

が、の部分には突っ込まないのね。

それでも、餅をこねる手を止めないのが、みちる
らしいけれど。

それじゃあ、私も私らしく、そのまま餅をついて
ましようか。

トン トン

規則正しい動きと一緒に、規則正しい音が響いて、
そのまま森に溶けてゆく。

そのなかに、私たちを呼ぶ声もまざってきたわ。

「おつかれ〜っ!!」

私とみちるは、走りながら呼びかけるふたりを見て——いいえ、その周りを見て微笑ほほえんでしまった。だって、走ってよろけそうになるたび、精霊たちがふたたりを支えてくれているのだから——

「愛されてるわね」

「ええ、愛されているわ。咲も、舞も」

—おしまい—